

# 児童文学の宗教性

大澤 千恵子

## はじめに

二十世紀末、一つの児童文学が世界中に熱狂的ブームを巻き起こした。イギリスの J. K. Rowling (1965-) 作、『ハリー・ポッターと賢者の石』(Harry Potter and Philosopher's Stone, 1997) である。その人気は現在も続き、キリスト教によって異教とされていた「魔法使い」の世界に、子どもだけでなく大人も夢中になっている。

ちょうど約一世紀ほど前にも、イギリスで同様の現象が起った。ハンフリー・カーペンターは、『秘密の花園』(Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's Literature, 1985) の中で、バリー (J. M. Barrie, 1860–1937) の戯曲『ピーター・パン』(Peter Pan, 1904) が大当たりをとったあと、「イギリスの子ども部屋では妖精が注目的になり、その子ども部屋で読まれる本には妖精たちがあふれ、その妖精熱といったら、なにか宗教的信仰に近いものだった」<sup>(1)</sup> と述べている。既成の宗教に変わる民衆の欲求を満たすものであったというのである。

キース・トマスによれば、16, 17世紀の前産業化社会であったイングランドでは、妖精は、占星術、ウィッチャクラフト、魔術治療、占い、古くからの諸予言、亡靈と並んで信仰体系の中に位置付けられており、当時の宗教上の考えと密接な関係にあり、「不運がどうして起きたのかを説明し、逆境の際に救済策を出すとき、こうした諸々の信仰は、体制化した教会と教会の競争相手たちの果たす役割に大変近い役割を果たしているように見えた」<sup>(2)</sup> というのである。このように、2, 3世紀以前におよび妖精の信仰が力を持っていたのだとすれば、カーペンターが20世紀初頭の妖精熱に宗教的なものを読みとったのもこじつけとは言えないだろう。

もちろんそれは、利用されている素材だけの問題ではない。作品そのものの中に明確な宗教性が含まれていることも少なくないし、たとえそうでないとしても多くの作品の構造に宗教性を読みとることは可能である。カーペンターは、児童文学が現在のような形で興隆する基盤となった1860年と1930年の間に現れた著名なイギリスの児童文学作家たち<sup>(3)</sup> はほとんど例外なしに、昔から主張されてきた宗教的な教えを拒否したか、あるいはそれに疑惑を抱いたという。その中の一人、ジョージ・マクドナルド (MacDonald, George, 1824–1905) の『王女とゴブリン』(The Princess and The Goblin, 1872) は、「キリスト教世界についての寓話を組み立てるのに民間伝承の題材を使」っており、「子どもの心に分け入ることができて、しかも精神的な滋養分を彼らに提供できる、既存のものに変わる新しい宗教的風景を創造」<sup>(4)</sup> したとしている。カーペンターは、「彼らが「アルカディア」とか、「良き場所」とか「秘密の花園」などを探し求めたのは、まずはおよそ伝統的なキリスト教信仰に取って代わるものを見つめようと試み」<sup>(5)</sup> たからであるとするが、その伝統は後の児童文学の中にも脈々と受け継がれている。マクドナルドの影響を受けた C · S · ルイス (Lewis, Clive Staples, 1898–1963) も、純粹に読み物として楽しめること

を主眼としながらも、キリスト教を子どものための妖精物語 (fairy tale)<sup>(6)</sup> として再創造するというはつきりとした意図を持って、現代児童文学の最高峰といわれるナルニア国ものがたりシリーズ (*Chronicles of Narnia*, 1950–1956)<sup>(7)</sup> を創作しているのである。

日本では、宗教性の目立つ児童文学として、宮沢賢治 (1896–1933) の童話があげられる。賢治は幻想的な創作童話を数多く書いているが、その中にかなり意図的に宗教的なものが含まれているとされている。作品には、自らの信仰であった法華經的宗教観が表出されていることはよく知られているが、しかしそれらは宗教書としてではなく、あくまでも文学作品として創作されたものにほかならず、現在もそのようなものとして読み継がれているといえる。

賢治は、自らの作品の創作、あるいは読まれ方に意識的であったが、何故童話を選んだのかということについては、これまでの賢治研究では十分考慮されてこなかった。しかし、賢治が小説ではなくあえて「童話」を創作したことは、見落としてはならない事実であり、それを抜きにして賢治の文学ならびに宗教性を深く理解することは難しいと思われる。

以上のように童話も含めた児童文学には、作品の素材ならびに内容の双方において宗教的な要素が多く含まれているといえるが、児童文学とは、そもそも「子ども」と「物語」の複合語である。そこで、本稿では、児童文学が誕生し、興隆する際、宗教とどのように関係にあったのかを概観した上で、作品に見られる宗教性と子どもという存在のもつ靈性をどのように関連づけて理解すればよいのかについて考察し、児童文学という近現代に特有の現象が含み込む宗教性について探っていくものとする。

## 1. 児童文学の誕生

児童文学が誕生するには、ある特別な意味で子どもという存在が認知されなければならなかつた。それは、大人の単なるミニチュアではなく、独自の要求と関心をもつ存在としての子どもである。それが認められるようになったのは、近代以降の西欧においてであるが、児童文学史を概観する場合、いち早く子どもという存在に目を向け、名作を数多く生み出したイギリスの流れを見る必要がある。

児童文学誕生以前には、「物語ではあるが、とくに子どもを対象にしたわけではないもの」と、「子どもや若い人を対象にしたものではあるが、物語ではないもの」という二つの分野があった。前者は、神話や伝説や妖精物語であり、後者は、教科書かお行儀の本、あるいは道徳の本である。イギリスでは、15世紀から17世紀末までに特に子どものために出版された本の大半は後者であった。お行儀の本は、初めのうちは自己改善についてのやさしいものであったが、次第に理性的で知識を持った子どもを教育するという高い理想を持つようになり、さらに日曜学校の隆盛や福音主義が強まった結果として宗教色を帯びる<sup>(8)</sup> ようになっていった。しかし、その間も前者の古い物語も依然として語られつづけていたが、子どものためのものという意識は希薄であった。

18世紀には、「貧民救済のための公共制度の崩壊をともなった産業の発達、本来の手工業徒弟制度の衰微、とりわけ英国中部および、北部諸州の産業都市の慈善学校に集まる弱年労働力の搾取」<sup>(9)</sup> という子どもの社会的状況の悲惨さは信仰の篤い宗教人の良心をさらに刺戟した。この啓蒙時代にはさまざまな思想を持った人がいたが、フェアリー・テイルを認めないということについてだけは、誰もが意見を同じくしており、以降数十年間は妖精物語に反対する機運は強まる一

方であった。識字能力があり理性を重んじる人にとっても、それらはやばで不合理なものに思われたし、ピューリタンをはじめ、信心深い人にとっても、子どもたちに「真実の宗教」であるキリスト教を教えるためには、偶像崇拜的な信仰を促すような物語は排するべきものだったのである。その最たるもののが、シャーウッド夫人 (Sherwood, Mary Martha, 1775–1851) で、彼女の『フェアチャイルド家物語』<sup>(10)</sup> (*The Fairchild Family*, 1818) は、あきらかにあらゆる子ども心中に地獄の業火への恐怖を植え付けようとしたものであった。

19世紀の初頭には頂点に達した教訓的物語<sup>(11)</sup> からは、当然のことながら、なかなか子どもの心をつかむような名作は生まれなかった。しかし、一方で、その頃になると、ヨーロッパ全体の潮流として啓蒙主義からロマン主義<sup>(12)</sup> が台頭するようになっていた。子どもは教化すべきものから一転して無垢なるものの象徴、礼賛されるべきものへと転換されるとともに、イマジネーションは人間にとって非常に大切なものであると認識されるようになった。不思議なことや非日常への関心が高まって、物語における空想性が再評価され、「子どもたちに文字どおり本当でないばかりか、実際にはありえないような物語を与えて、いっこうに害はない」とみんなが考えるような雰囲気<sup>(13)</sup> が生まれたのである。

いち早く妖精物語に关心が向けられたのはドイツで、グリム兄弟のもとで民族的遺産としてのメルヒエンが蒐集されたが、今日の児童文学の萌芽が誕生したのは、その影響を受けたデンマークロマン主義の中からであった。19世紀初頭のデンマークでは、政治的敗北と経済的破綻<sup>(14)</sup> という災厄と同時に、文学と精神文化全体に光彩を放つ黄金時代が花開いていた。人々は大小の悲しみを芸術的宗教的価値の中で忘れようと努めたが、そのことが当時優勢だったロマン主義の文学形式の促進につながった。そのような中、ハンス・クリスチヤン・アンデルセン (Andersen, Hans Christian, 1805–75)<sup>(15)</sup> が登場したのである。

アンデルセンは、1835年に『子どものための童話集』(*Eventyr fortalte for Børn*, 1835) の第一巻を刊行したが、その中には、伝承の昔話から離れた独自の空想的な世界を描いた童話「イーダちゃんの花」("Den Lille Idas Blomster") が載せられており、そのときから児童文学は伝承の昔話と袂を分つて独自の歩みを始めたこととなった。この物語は、イーダという少女が、夜中に自分の花や人形が舞踏会を開いているのを垣間見るという幻想的な世界を描いたものである。妖精物語特有の語り出し、「むかしむかしあるところに…」で始まるのではなく、リアリティをもった一少女の目を通して非現実的な世界があたかも現実のことであるかのように語られているという意味において、創作の童話となったのである。以来、その生涯に渡って156編にも及ぶ童話を創作し、児童文学の古典として世界中で親しまれている。そして、彼の作品は、1846年にはイギリスでも出版され、「すぐにイギリスの児童文学にとけこみ、フェアリー・テイルとファンタジーの人気復活上、グリム童話につぐ第2の重要な要素」<sup>(16)</sup> となった。児童文学は、それを受け継いだイギリスにおいて発展し、今日の隆盛の基礎を築くことになったのである。

アンデルセンは、それまでの教訓的な物語と全く違う考えをもって童話を創作した。「マッチ売りの少女」("Den lille pige med Svolstikkerne", 1845) は、最もよく読まれている作品の一つで、少女の死をもって終る悲劇的な物語である。しかし、無条件に祖母の愛を信じてその胸に抱かれる少女の無垢な魂は、地獄に落ちるはずなどなく、必ず恵み深い神のみもとにゆけるというアンデルセンの信心をもとに描いたシーン<sup>(17)</sup>は、先の『フェアチャイルド家物語』と真っ向か

ら対立する死生観<sup>(18)</sup> である。

アンデルセンの童話について、デンマークの文芸批評家のゲオルグ・ブランデスは、「人間の中の動物をでなく、動物の中の人間を描く」<sup>(19)</sup> と、イソップやラ・フォンティーヌのような動物の皮をかぶった人間の寓話とは本質的に異なることを指摘している。寓話の動物は、実は動物の皮をかぶった人間に過ぎず、人間の視点で描かれており、現実を風刺するという意味においてありうべからざる話ではない。空想的な児童文学が生まれる前の教訓物語の中には、動物や無生物がヒーローや語り手になるものもあったが、作者は現実にはありえない事柄について可能な限り避けた。しかし、アンデルセンの中で描かれる生物・無生物は違う。それらは決して人間のアレゴリーではないし、人間の視点で物をいわない。あくまでも、そのもの自身の視点で物語は展開されていく。すなわち、彼の物語は、寓話ではなく妖精物語と同一の地平にあるということに他ならない。

ヨーロッパの思想的主流から遠くはなれた片田舎の貧しい家庭で育ったアンデルセンは、キリスト教の深い信仰を持つとともに、母親同様、北欧の民俗的信仰の影響もかなり強く受けていた<sup>(20)</sup>。もともと空想癖があったようだが、幼い頃から妖精物語を語り聞かせられた彼は、その中にしばしば登場する妖精を心から信じていたのである。

しかし、童話の創作に影響を与えたのはそれだけではない。アンデルセンは、デンマークの黄金時代を彩る一人、電磁気の発見者エアステッド<sup>(21)</sup> (*Ørsteds, Hans Christian, 1777–1851*)との親交に見られるように、合理主義的思考にも親しみをもっていた。エアステッドが『自然における精神』(*Ånden i Naturen, 1849*)の中で語る哲学とは、日常的な世界の背後に、あるいはそれを超えたところにもっと高度な世界が存在しているというものである。このエアステッドの哲学の影響により、空想世界だけが語られる伝承の物語から離れ、現実の中に童話的な世界を見出そうとしたといえる。北欧文学の研究者である山室静は、「童話は何もお姫さまや魔女や、人目をそばだたせるような花やかな事件や素材を題材にしなくとも、土手に咲いているつつましいヒナギクのような存在にも、目をとめてみれば十分な美があり、物語もあることを彼は悟った」<sup>(22)</sup>としている。

つまり、アンデルセンは、土着的な信仰の幻想性と近代科学の現実性を統合させることで、童話の世界に自己の表出形態を見出したのである。初期の作品で、全くのオリジナルの一つである「ヒナギク」("Gåseurten", 1838) も幻想と現実の均衡をよく示す作品である。

子どもたちが学校のいすにこしかけて、勉強しているあいだに、ヒナギクの花も、同じように、小さい緑の茎の上に座って、あたたかいお日様や、まわりのすべてのものから、神さまがどれほどお恵み深いかを学んでいました<sup>(23)</sup>。

アンデルセンによって、土着的な信仰とキリスト教の信仰と近代科学的な合理性とが密接に絡み合って、子どもが喜ぶ創作童話というジャンルが産声を上げたのであるが、それは、北欧以外のヨーロッパにはみられなかった文学的パラドックスの中から生じたものである。すなわち、感情的高揚が精神の明晰さをくもらせることなく、たえず夢と現実とが適切な均衡にあることを目指したデンマークロマン主義のあり方の中から、児童文学の卵は産みおとされたのである。「子ども」の「物語」が成立するためには、日常と非日常、空想性と現実性の矛盾を統合させる二重構造が必要だったといえる。

つまり、童話、あるいは児童文学においては、理性と感性、幻想と現実との均衡が非常に重要な役割をもっているということになる。

## 2. 虚構性と非虚構性

賢治は、『注文の多い料理店』の広告文の中で「大小クラウスたちの耕していた、野原や、少女アリスがたどった鏡の国と同じ世界の中」であると自らの作品について説明している。それが、アンデルセンやルイス・キャロルの物語を指し示していることはすでに明らかにされており、彼らの作品と同一線上にあるということである。

優れた文学の創作者であると共に宗教的実践家であった賢治は、アンデルセンが拓いた童話・児童文学の世界の中に自己の法華経の世界観を描き得る土壤があることを感じ取っていた。それは、賢治自身も現実の挫折を経て、イマジネーションによって世界を捉え、どうにもならない厳しい現実を乗り越えて生きる希望を見出そうとしていたからにほかならない。

アンデルセンの童話同様、賢治の童話『雪渡り』に登場する狐の紺三郎も人間のアレゴリーとして描かれてはいない。狐たちは自分たちが異類であることは承知している。その上で人間の子どもである四郎、かん子との種を超えた深い交歓がある。だからこそ、この人間の子どもの信頼、友情に対して、心から喜ぶ場面は感動的である。

「…今夜みなさん深く心に留めなければならないことがあります。それは狐のこしらえたものを賢い少しも酔はない人間のお子さんが喰べて下すったといふ事です。そこで、みなさんはこれからも大人になってもうそをつかず人をそねまず私共狐の今迄の悪い評判をすっかりなくしてしまうだらうと思ひます。…」狐の生徒はみんな感動してワーッと立ちあがりました。そしてみんなキラキラキラキラなみだをこぼしたのです。

(『校本宮沢賢治全集、第十一巻』 p.112)

このように、それぞれがその本性を失わないままに、人間と同じように口をきいたり、心をもっているのは、理性的な大人から見れば、全くありえない虚構かもしれない。イマジネーションの世界に過ぎないであろう。賢治自身そのことは承知しており、「著者の心象中にあらわれたもの」であるとしている。したがって、賢治の童話<sup>(24)</sup>はアレゴリー以上に虚構である。

天沢退二郎は、以下の書き出しについて、賢治童話における文学としての虚構性を指摘する。

「わたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです」(童話集『注文の多い料理店』序) / 「このおはなしは、ずゐぶん北の方の寒いところからきれぎれに風に吹きとばされてきたのです。」(「氷河鼠の毛皮」) / 「…ざあざあ吹いてゐた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行はれてゐた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。」(「鹿踊りのはじまり」)

天沢によれば、これらは、「その物語の語りが語り手のさらに彼方からくるものであること、語り自体のオーリジンの非人称性というものを直截に明らかにしている」<sup>(25)</sup>ものであり、「作者はその物語の創造主ではない、風が私に物語ってくれたのを、そのとおりに書いたまで」<sup>(26)</sup>という「詩人の強い虚構への意志」としている。

それに対して、佐藤郁之は、生前出版された唯一の童話集『注文の多い料理店』の広告文の中で

「これらは決して偽でも架空でも窃盗でもない」と非虚構性をわざわざ宣言していることに着目している。そして、宗教研究の立場から、むしろそれは「宗教言語としての非虚構への意志」であるとし、そこに「虚構としての文学言語からの距離」<sup>(27)</sup>を見ている。賢治自身が語るこの矛盾は、賢治童話の理解を複雑化させ、研究者の意見を分けるところである。つまり、賢治の童話の虚構性をみた場合には宗教性が否定され、非虚構性をみた場合には文学性が否定されてしまっているのである。

しかしながら、賢治の童話においては、そのどちらも否定できない問題である。宗教性については、手帳に、高知尾氏の奨めにより「法華文学の創作」と記していたことや代表作の一つ『銀河鉄道の夜』の中で「天上へなんか行かなくたっていいぢやないか。ぼくたちこそで天上よりももっといゝとここさえなきやいけないって僕の先生がいってたよ。」と、日蓮が目標として努力した、あるいは国柱会が熱心に活動した娑婆即寂光土の思想を語っていることから、また、文学性については、晩年の賢治が法華経の布教よりもむしろ創作活動に打ち込んだことからも否定できない。島薦進は、賢治が「芸術作品を通して宗教的なビジョンや解放への道を示唆すること、覚醒や解放への願いとそれらを目指すような生き方についての信念を、美的喜びとともに人々と分けもどうとし、自らの詩や童話、とりわけ後者にそのような力があると信じ、作品を書きつづけた」<sup>(28)</sup>ことに牧口常三郎や谷口正春との違いを見ている。つまり、賢治の童話においては宗教性と文学性が不可分であるということができるであろう。

逆にいえば、童話だからこそ、虚構であると同時に非虚構となることができ、文学性と宗教性を共に含有できるのである。なぜなら、先に述べたように、童話の世界の中では、夢と現実とが適切な均衡を保たれ、日常と非日常、空想性と現実性の矛盾を統合させる二重構造を含むことが可能だからである。

このような二重構造は、枠物語と称される形式と対応関係にある。そして、児童文学におけるファンタジーと呼ばれる作品はすべて広い意味での枠物語であるとされる。物語の中には、主人公にとっての現実という額縁に囲まれた異世界があり、その中に入りて冒険（非日常経験）する。

昔話もこのような構造を持つ。多くの場合、此岸と彼岸、つまり現世と他界、日常と非日常の二つの世界が描かれている。ところが、昔ばなしは、伝承の物語であり、特定された作者がおらず、語りにはいくつかの厳しい法則がある。ヨーロッパの昔ばなし研究の権威であるマックス・リュティは、その法則として「一次元性」「平面性」「孤立性」<sup>(29)</sup>を挙げる。これらの法則により、昔ばなしの中では、たとえ形式は枠物語であっても一次元的に語られる。したがって、昔ばなしの中には超越的な彼岸者も同じ次元で語られるために、アンデルセンが対比させたような現実と幻想という輪郭が曖昧になり、もともとは宗教的なモティーフであったはずの妖精も魔法使いも昔ばなしモティーフとしてその中に埋没してしまうのである。昔話の中では、妖精も魔法使いも確からしさを失い、虚構の中で語られる空想的な存在となる。

宗教改革の時代、啓蒙の時代を経て産業化が進むにつれて、人々の心の中で妖精（fairy）はほとんど絶滅の危機に瀕していた。妖精物語（fairy tale）すなわち荒唐無稽な話の中で平面的な存在として息を潜めていた。しかしながら、児童文学は、物語そのものの中に理性と感性、空想と現実を内包している。その二重構造のなかで、現実が破られるのを目の当たりにした子どもの読者にとって、自分が現実であると思っていたところの額縁自体の確からしさが失われる。する

と、イマジネーションの世界の中で、平面的な絵にすぎなかった妖精や魔法使いが、額縁を破つて外へ飛び出して立体的になる。かくして、妖精も魔法使いも児童文学の世界の中でリアリティをもって息を吹き返す<sup>(30)</sup>こととなつたのである。

このイメージの力を徹底的に擁護したのは、C. S. ルイスのナルニア国ものがたりシリーズである。賢治もルイスも、イメージ世界が重要な意味を持つ、ファンタスティックな児童文学作品の中に自己の宗教世界を描き出そうとする意図があつたことで共通している。

子どもたちがふとしたきっかけでナルニアと呼ばれる別世界を訪れるこの物語は、現代児童文学の最高峰の一つとされる。シリーズ第4巻『銀のいす』の中で、子どもたちと王子と案内人のぬまびとが、想像力について魔女と論争を繰り広げる場面がある。

地下の暗闇の世界に住む魔女は、「ナルニア」などという国は、夢に過ぎないという。ぬまびとがその世界には太陽があり、ライオン（の姿で表わされる超越神 Aslan）がいたというと、魔女はランプから太陽を、ネコからライオンを想像でつくりあげたに過ぎず、そんなものは存在しないという。自らもファンタジー作家であり、児童文学研究者の井辻朱美は、この問い合わせについて「神の存在を証明せよと求められているのに近い」<sup>(31)</sup>という。魔女の言葉は、まさにフロイトの主張と共通する。フロイトは、「われわれの寄辠ない状態を耐えうるものにしたい」という要求を母胎とし、自分自身と人類の幼児時代の一群の観念が生まれる。……宗教の観念も、文化の他のあらゆる所産と同一の要求——つまり、自然の圧倒的な優位にたいして身を守る必要——から生まれたのだということだ」<sup>(32)</sup>とする。神の存在を近代科学で決定的に「立証」することはできないとして宗教の「寓話」性を指摘し、結局宗教は幼児時代の「人間の願望から生まれた」幻想にすぎないと決めつけた。

それに対してぬまびとは次のように答える。

よろしいか。あたしらがみな夢を見ているだけで、ああいうものがみな……頭の中につくりだされたものにすぎないといったましょ。たしかにそうかもしれませんよ。だとしても、その場合ただあたしにいえることは、心につくりだしたものこそ、じっさいにあるものよりはるかに大切なものに思えるということです。あなたの王国のこんなまっくらな穴が、この世でただ一つじっさいにある世界だ、ということになれば、やれやれ、あたしはそれではまったくなき世界だとやりきれなくてなりませんのさ。……あたしらは、おっしゃるとおり遊びをこしらえてよろこんでる赤んぼ、かもしれません。けれども、夢中で一つの遊びごとにふけっている四人の赤んぼは、あなたのほんとうの世界なんかをうちまかして、うつろなものにしてしまうような、頭のなかの楽しい世界を、こしらえあげることができるのですとも。

井辻は、高校生の時にこの物語を読んで、人生における苦しみは我慢しなければならないものだという現実の閉塞感から開放されたという。「わたしたちはふだん地下の世界にいるような気持ちで日常をくらし、魔女の言葉に反論できないでいるのですが、ぬまびとは想像力の力について、強力な弁護をおこない、ほんとうに想像力がよろこぶ世界であれば、それこそがまことの世界である、といいます。……ぬまびとは彼方の「現実」に橋をかける方法として、想像力、つまり、イメージの力を提唱した」<sup>(33)</sup>と述べている。

フランスの哲学者ガストン・バシュラールによれば、「想像力は語源が暗示するように現実のイ

マージュを形成する能力ではなく、現実を越え、そして現実を歌うイマージュを形成する能力なのだ。…想像力は事物や劇以上に発明するものであり、新しい生命や精神を発明し、映像（ヴィジョン）の種々の新しいタイプを所有する目をひらかせるのだ」<sup>(34)</sup> という。だとすれば、たしかに井辻のいうように、イメージの世界は現実を再構築する上で非常に大事な役割を果たしているということになろう。

賢治は、実践的宗教活動においては、どうにもならない厳しい現実を前に挫折した。しかしながら、その現実を童話によって超克しようという試みには最後まで希望を抱きつづけた。それは、彼が幻想を通してより深いリアリティに到達できるという確信をもっていたからだろう。目の前に見える現実を超えて深遠な真実に到達することで、現実を再構築していくとき、童話の虚構性は非虚構となるのである。

では、大人にとって荒唐無稽に過ぎないものが、なぜ子どものための物語においては現実を再構築できるものとなるのであろうか。また、そのことは宗教とどのように関わっているのであろうか。次節では実際の子どもとそのイメージの世界について考察してみたい。

### 3. 子どもの靈性

人間の持つイメージ世界について、さまざまなフィールドワークを行なっている文化人類学者の藤岡喜愛は、玉川学園小学部で共同研究を行い、大人が認識する子どもらしさや子どもが持つ特有のイメージについて興味深い論点を提示している。その中で指摘されているのは子どものイメージにおける予見性、邂逅性、没我性、祈祷性などであるが、これらは子どもの始源的な宗教的感性と密接に関わっている。

共同研究者の一人、上原輝男は、「科学時代の今の子どもたちにとって、祈りを否定する子どもは少ない。子どもたちに、ごく自然に神を語らせると、神の出現を口にする。現われるかどうかを期待する。つまり、現われるかどうかという受け皿が用意されているということである。事の成るか成らぬかの期待の祈りというよりも、唯識論的立場に立たされる働き自体が、イメージ活動の中にある」<sup>(35)</sup> という。

要するに、子どもたちは信仰云々ではなく、自己のイメージ世界の中で、感覚として超越的なものと交信しているといえるのである。しかもそれが子どもにとって、自己のイメージ世界の中で起こっていることであるにも関わらず、現実世界とも密接に結びついている。

例えば、いくらその場所で待っているようにと言い聞かせても、子どもが動いてしまって迷子になるのは、地理を知らないからではなく、会えることへの明るい予見が自己のイメージの中にあり、その誘因性によるものである。上原は、子どもたちは自己のイメージの誘因性に勝てるほど、イメージの不信者ではないとし、子どものイメージにおける予見性と呼んでいる。また、そこには必ず会えるはずだという祈祷性も働いており、両者があいまって子どもにとっては未来に起りうるイメージと現実とが不可分ではないことを意味しているといえよう。

また、それは未来におけるものだけではない。子どものイメージの中では時間の不可逆性はなく、未来と同時に過去も包括されている。

同研究の中で、武村昌於は、「穴」という題の作文を書かせてイメージの始源性を探っている<sup>(36)</sup>。武村が着目しているのは、小学校二、三年生でも「穴」について思い出のように語ることが

あるということである。ある三年生の子どもは「今はあまり穴をほったりしません。けど、小さいころのあの思い出が、今思うとなつかしくてたまりません」と懐かしんでいるが、この懐かしさとは、子どものイメージにおける邂逅性であるという。つまり、幼い子どもにとって実際の思い出が懐かしいのではなく「穴」のイメージがその子とともにあったから懐かしいと感ずるのである。

藤岡は、大人を対象にした別の実験から、人間の「イメージ界の中には、ほとんどあらゆる種類のイメージを蓄えている。過去に属するものも未来に属するものも。しかもそれらは運動しており、新しいイメージを産み出しさえする」<sup>(37)</sup> ことを実証しているが、幼い子どもが懐かしいと感じるのは自己の経験というよりもイメージによるものであろう。この邂逅性とは、大人にもあるデジャーブュ現象に近いのではないだろうか。それまでに一度も経験したことがないのに、かつて経験したことがあるように感ずる体験は、誰しも持ちうるものである。大人であれば、「そんなはずはない」とそこに不信感が伴うが、子どもにはそれがない。子どもにとって「ごっこ遊び」は重要な経験であるが、あえて言うならば、そこで味わう感覚と近いのかもしれない。「ごっこ遊び」は、現実の体験的な冒険ではなく、先行する物語との邂逅であり、イメージの世界における冒険であるからである。

上原は「この予見性と邂逅性は循環的機能のように子どもを支配している」という。そして、「子どもが神さまと出会うのも、右の機会、もしくは機運釀成の最中においてである、神さまの役割は、一般に祈願者に味方することであるが、子どもにとっては、決して部外者に味方を要請することではなくて、予見と邂逅の必然の状況時に神と交信している…子どもたちは神の存在をいうよりも前に、神はあらわれるという。本研究の考え方でいえば、予見と邂逅と循環の強い期待の形式を神と祈祷とに言い換えることになる」<sup>(38)</sup> とするが、それは子ども特有の神観念といつてもよい。大人であれば祈祷性によって神が現れるのであろうが、子どもにとっての神は、予見と邂逅という自己のイメージの中に立ち現れ、現実を支配する力を持っているのである。

賢治の童話『風の又三郎』でも、現実と乖離していない子どものイメージ世界の中で超越的存在との邂逅が如実に描き出されている。リアリズム風に描かれるこの物語は、「村の子どもたちが「風」という現象に対して抱く怖れや親しみや知的関心などの交錯する心情が『風の又三郎』という神靈的存在をつくり出し」<sup>(39)</sup> たものとされている。

転校生の高田三郎との出会いの場面では、中心人物の一人である嘉助が、「あゝわかったあいつは、風の又三郎だぞ。」と叫ぶと、初めての出来事であるにもかかわらず、「さうだっとみんなもおも」うのである。子どもたちの確信に合理性はない。しかし、感覚的なところで確信しているのは、イメージにおける邂逅性や没我性が働いているからである。そして、二百二十日の風が吹くと「又三郎は飛んでったがも知れないもや。」と又三郎との別れを予見するが、その通り又三郎は子どもたちの前から姿を消す。お父さんの仕事の都合で転校したと先生は説明するが、嘉助は「さだないな。やっぱりあいづは風の又三郎だったな。」と最後まで又三郎であったことを信じて疑わない。結局、高田三郎が又三郎であったか否かは語られずに物語は終る。したがって、どちらが夢でどちらが現実かわからないのであり、この物語は「イーダちゃんの花」と同様に、幻想と現実の絶妙な均衡が描き出されているといえよう。つまり、転校生の高田三郎は現実であろうとなかろうと、むしろその現実飛び越えて、神靈的存在である又三郎との出会いも別れも子ど

もたちのイメージの中ではリアリティを持っているのである。

では、現実時空とイメージの接点はいったいどこにあるのであろうか。小林照子は、子どもに「留守番」のイメージを作文に書かせることからその接点を探っている。「「留守番」は、その機能からいえば、現実時空に物的に存在する家屋や財産の守衛であろうが、子どもにとっては、ひとりの世界の設定と持続である」と、「その語りは、留守という空白感を埋めようとする自己のイメージ躍動であるとするら感じられる」<sup>(40)</sup> という。子どもにとって、留守番は「さみしくてくらいみち」(女・二年) をとおるものであり、「家がなんだか広く感じる」(女・二年) 世界であり、「いろいろなものが生きてしゃべっているように見えてくる」(女・五年) 世界であり、「こわくもないものがこわくなる」(男・三年) のである。

これらの表現から、子どもが住みなれた家という現実時空とは別の「…のような気がする」世界に入りこんでおり、それは変幻・伸縮自在のイメージの世界であることがわかる。こうなると、子どもは、この「気のせい」の世界に棲息し続けなければならなくなり、無自覚のままではあるが、ふりはらってもふりはらっても、「そのことばかり考えてしまい」「忘れようとしても忘れられない」というイメージの活動性にさらに誘引されていく。自らの予見と邂逅から逃れられなくなり、夢中になってしまった子どもは、イメージの中に我を没入しているのである。

前述の『風の又三郎』の中で、嘉助が山の中でひとりはぐれて道に迷ったときが、まさにそのような状態であった。(あゝ、こいつは悪くなつて來た。みんな悪いことはこれから集つてやつて來るのだ。) と嘉助は予見し、その通りになる。

けれどもどうも、それは前に来た所とは違つてゐたやうでした。第一、薊があんまりたくさんありましたし、それに草の底にさっき無かった岩かけがたびたびころがつてゐました。そしてたうたう聞いたこともない大きな谷が、いきなり目の前に現はれました。すゝきがざわざわつと鳴り、向ふの方は底知れず谷のやうに、霧の中に消えているではありませんか。

(『校本宮沢賢治全集第十巻』, p.191)

この世界は、嘉助のイメージに誘引されて没入してしまった世界である。そして、嘉助はそのときに自分たちがイメージとして作り出したものではなく、神靈的存在である本物の「風の又三郎」と邂逅しているのも示唆的である。

飯住良夫は、暗室における実験で、闇のイメージを分析<sup>(41)</sup> しているが、現実時空として闇の中に入れられた子どもたちは、それと対峙したままでは自己を維持できないとする。視覚遮断された闇の中で、見ようとすればするほどその実体は、闇以外のものには写らない中で、子どもたちが自己の世界を飛翔させ、さらには自己の闇の世界を発見するためには、闇との同居か対峙を迫られるのだという。その際、恐くて泣き出してしまう子は、現実時空と対峙したままであり、そこからの逃避を図ろうと努力はするが、そこに新しい自己の世界を発見することには至っていない。(闇という) 対象との関係におかれたりの状況を予見し、その邂逅から逃避することのみに没我していくのであり、そこから遊離・飛翔は発見できないままでいるからである。飯住は、それとは対照的に「おもしろかった」「もう一度やってみたい」という子たちは、現実時空から遊離する楽しさを感じているという。現実時空からイメージを切り離し、その世界に遊べる子どもにとって、現実時空では恐ろしいはずの闇も「恐いけど楽しい」と感じられるのである。

また、上原は、“手形”を押してその線条に自分の運勢を自分で占うという実験<sup>(42)</sup> も行なっ

て、子どもにはイメージへの没入性があることを指摘する。中には「自分がけがをする」という予言を真顔でする子もいたというが、そこには危機接近の緊迫や恐怖心ではなく、むしろそのことを楽しんでいるようだったという。上原は、そのことは現状の認識と対応のあり方に関係があるとする。そして、「一見恐怖心を抱く子は現状認識をイメージで包み込んでいるとされるが、同時にその危険から逃避しようとする意識が強いために、状況と自我の屹立は消えず、案外、現実から遊離できない。それに較べて、先の手形占いの子が、身に迫る危険を口にしながらも、平然としておれるのは、イメージの誘引に現実時空と隔離する」<sup>(43)</sup> からであるとしている。

子どもにとっては、自分の想像力の内側に起こることは、その外の世界で起こっていることと同じくらい真実であるということなのであり、一つのことが真実であり、また真実でもないというこの二つの考えを、子どもたちは何の矛盾もなく同時に受け入れることができる。そして、想像の世界にいったん身を任せ、後に再び現実に戻るとき、新たな現実が再構築されるのである。

目に見えない想像の世界が、人生経験の少ない子どもにとっては現実と同じようにリアリティを持っている。子どもはこの世を越えた神祕の世界を如実に感じ取ることができるのだ。このような子どもの神祕的感性は子どもの靈性の主要な特徴の一つと呼べるものであろう。

### おわりに

児童文学は、物語そのものの中に理性と感性、空想と現実を内包している。その二重構造のなかで現実と現実の向こう側にある世界を同時に描き出そうとした物語の中では、登場人物が現実だと思っていたところの確からしさが失われ、額縁が破られて非現実であったはずものが現実世界に流れだす。それは、現実を超えたより深いリアリティへの到達であるといえる。

アンデルセンも賢治も、他の多くの児童文学作家たちも、イマジネーションをめぐらすことによって全世界を捉え、あらゆる謎を解き、人生の意味を解釈する空間を作り出そうとした。それらは日常的な現実を超えたイメージの世界を創造することによる、新たなリアリティの獲得でもあった。彼らが想像した世界は確かにファンタジーに過ぎないかもしれない。しかし、そもそも宗教はある意味で現実世界からは超越した世界もあるのである。脇本平也は「宗教的な夢をいだくか、いだかないか、超越的な願いをもつか、もたないか」が宗教者と現実主義者を分つ相違点であるという。そして、世界宗教が掲げる理想や目標がその超越性ゆえに「常人には不可能といわざるをえない、その意味では単なるファンタジーにすぎないような印象さえあることをがむしろ多い」<sup>(44)</sup> と述べ、さらに「宗教者は実現不可能とわかってはいても、だからといってこの理想目標をあきらめ捨てるのではなく、なおこれを夢として心にいだき、究極の願いとしておのれをこれに投托する、という生き方をする。……そういう人間のダイナミックなあり方が、宗教者のあり方」<sup>(45)</sup> であると述べている。

人間は目の前の苦しみから逃がれようとすると、現実時空にばかり執着していると、状況を突き抜けることができずにその中でもがきつづける。しかし、いったんイメージの誘引性に没入し、現実時空から離れ、そこにある苦しみと向き合うことにより、苦しみが自己のイメージから作り出されたに過ぎないことに気づき、現実時空の均衡が取り戻される。苦しみが客觀化されることで、かえって新たな現実が構築され、苦しみを乗り越える可能性を見出すことができる。

子どもが現実時空から離脱するイメージ世界と深く関わっている児童文学は、どうにもならな

い困難な現実とそこから離れた異次元としての空想世界との均衡を保つことが可能であり、その世界自体に作者の宗教的世界観を盛り込み得る受容力を持っている。児童文学の宗教性は、イマジネーションによって現実から離れることで、自己が現実であると思っていたことのがいかにイメージの誘引性に基づいていたかに気づき、そこから新たな現実を再構成しようとする力が生み出されるところにあるといえる。

## 参考文献

- 天沢退二郎 『宮沢賢治の彼方へ 増補改訂版』思潮社, 1977. (1968年初版第一刷)  
 ————— 『<宮沢賢治>論』筑摩書房, 1986.
- フィリップ・アリエス 杉山光信, 杉山恵美子訳『<子供>の誕生』みすず書房, 1980.  
 ————— 『<教育>の誕生』新評論, 1983.
- H. C. Andersen *Samlede Eventyr og Historier*, København, Jubilæums—udgave, 2001.
- H. C. アンデルセン 鈴木徹郎訳『アンデルセン自伝』潮文庫, 1972. (H. C. Andersen *H. C. Andersen's Levendsbog 1805–1831*, København, 1926.)  
 ————— 大畑末吉訳『アンデルセン自伝——わが生涯の物語——』岩波書店, 1975. (H. C. Andersen, *Mit Eget Eventyr uden Digtning*, København, 1942.) (H. C. Andersen *Mit Livs Eventyr*, København, 1877.)
- 井辻朱美 『夢の仕掛け』NTT出版, 1994,  
 ————— 『ファンタジーの森から』アトリエ OCTA, 1994,
- 岩田慶治編著 『子ども文化の原像』日本放送出版協会, 1985.
- 小澤俊夫 『昔話の語法』福音館書店, 1999.
- 大島宏之編 『宮沢賢治の宗教世界』溪水社, 1992.
- 恩田逸夫 『宮沢賢治論』全三巻, 東京書籍, 1990.
- ハンフリー・カーペンター, マリ・プリチャード 神宮輝夫監訳『オックスフォード世界児童文学百科』原書房, 1984. (Humphrey Carpenter and Mari Prichard, *The Oxford Companion to Children's Literature*, London, Oxford University Press, 1984.)
- ピーター・カヴニー 江河徹監訳『子どものイメージ文学における「無垢」の変遷』紀伊國屋書店, 1979. (Peter Coveney, *The Image of Childhood The individual and Society : a Study of the theme in English Literature*, s.l., Penguin Books, 1967.)
- ハンフリー・カーペンター 定松正訳『秘密の花園』こびあん書房, 1988.
- 定松 正・本多英明 『英米児童文学辞典』研究社, 2001.
- 佐藤郁之 「宮沢賢治における宗教言語の可能性」『宗教研究 三四四号』日本宗教学会, 2002.
- 島蘭 進 「「生存競争」と民衆社会運動」天理大学おやさと研究所年報 第3号, 1997.
- Elias Bredsdorff *Hans Christian Andersen A Biography*, London, SOUVENIR PRESS, 1975. (E. ブレッドスドルフ, 高橋洋一訳『アンデルセンー作品と生涯』小学館, 1976.)
- Johan de Mylius *H. C. Andersen — Liv og Værk*, s.l., Aschehoug, 1993.  
 ————— *Hr. Digter Andersen*, s.l., G·E·C GAD, 1995.
- 鈴木徹郎 『ハンス・クリスチャン・アンデルセン その虚像と実像』東京書籍, 1979.
- J. R. タウンゼンド 高杉一郎訳『子どもの本の歴史英語圏の児童文学』上, 岩波書店, 1982. (John Rowe Townsend, *Written for Children an Outline of English-language Children's Literature*, Middlesex, Penguin Books Ltd., 1965.)
- フレデリック・デュラン 毛利巳彌, 尾崎和郎訳『北欧文学史』白水社, 1976.
- キース・トマス 荒木正純訳『宗教と魔術の衰退』法政大学出版局, 1993, (Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic*, George Weidenfeld & Nicolson Ltd., 1971.)
- 中里 巧 『キルケゴーとその思想風土』創文社, 1994.
- 日本アンデルセン協会 『アンデルセン研究』第1—20号, 1981—2001.

日本児童文学学会編 『アンデルセン研究』 小峰書店, 1973.  
ステファン・ハイルスコ・ワ・ラーセ監修, 早野勝巳監訳『デンマーク文学史』 ビネバル出版, 1993.  
原 子朗 『新宮沢賢治語彙辞典』 東京書籍, 1999.  
藤岡喜愛 『イメージと人間』 日本放送出版協会, 1974.  
アンソニー・S・マーカンタンテ 中村保男訳『空想動物園』 文化放送出版, 1977.  
宮沢清六・天沢退二郎・猪口弘之・入沢康夫・奥田弘・小沢俊郎・堀尾青史・森荘巳池編 『校本 宮澤賢治全集』 全14巻, 筑摩書房, 1973-1977.  
マックス・リュティ 小澤俊夫訳『ヨーロッパの昔話』 岩崎美術社, 1969,  
脇本平也 『宗教学入門』 講談社, 1997.  
渡邊陸三訳・編 『アンデルセン研究』 甲陽書房, 1970, p.152. (Svend Larsen, Paul V. Rubow, Erik Dal, *A Book on the Danish writer HCA, his life and work*, Copenhagen, 1955.)

註

- (1) ハンフリー・カーペンター, 定松正訳『秘密の花園』, こびあん書房, 1988, p.368.
- (2) キース・トマス, 荒木正純訳『宗教と魔術の衰退』 法政大学出版局, 1993, p.11. (Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic*, George Weidenfeld & Nicolson Ltd., 1971.)
- (3) ルイス・キャロル (Carroll, Lewis, 1832-1898) から A. A. ミルン (Milne, Alan Alexander, 1882-1956) まで
- (4) カーペンター, 定松訳, 1988, p.168.
- (5) カーペンター, 定松訳, 1988, p.168.
- (6) フェアリー・テイル／童話／昔話／おとぎ話／メルヒエン。時をはるか昔と定めた、現実では起こり得ない出来事についての物語。妖精など超自然の生き物が必ずしも登場するわけではない。
- (7) ハンフリー・カーペンター, マリ・ブリチャード, 神宮輝夫監訳『オックスフォード世界児童文学百科』 原書房, 1999, p.917.
- (8) 『オックスフォード版児童文学辞典』 (*The Oxford Companion to Children's Literature*, 1984) 'Moral Tale' の項。
- (9) ピーター・カヴニー, 江河徹監訳『子どものイメージ』 紀伊國屋書店, 1979, p.43.
- (10) 子どもに腐った死体を見せ、肉体の罪深さを教えたり、兄弟げんかの結末が死と地獄行きに終ることを諭すなど改悛させようとする教訓が各章後毎にある家族物語で、19世紀のベストセラーであった。
- (11) しかしながら、『フェアチャイルド物語』に描かれる地獄の場面は、じつはあれほど拒否されたイメージネーションの世界であり、その点に既にロマン主義的萌芽が見られなくもない。教訓性が全くないルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』はその約50年後に出版された。
- (12) 「道徳教化的、功利的な児童文学に対するロマン派の反抗は、18世紀の観念連合論者の児童像に対する全面的反抗の一部であった。」「1830年代以降の子どもをテーマとする文学を支配した要素は、社会の中におかれた子どもたちの境遇であった」し、「ロマン主義時代には、子どもの無垢とかよわさが強調された」た。(カヴニー, 江河監訳, 1979, p.43.)
- (13) J. R. タウンゼンド, 高杉一郎訳『子どもの本の歴史上』 岩波書店, 1982, p.126.
- (14) 1807年の英國艦隊によるコペンハーゲン砲撃、ノルウェーの喪失、1813年の国家破産 (ステファン・ハイルスコ・ワ・ラーセ監修, 早野勝巳監訳『デンマーク文学史』 ビネバル出版, 1993, p.62.)。
- (15) 「北欧浪漫主義の時代に、詩、小説、紀行文、戯曲など幅広い創作活動を行い、多くの作品を残しているが、中でも、ドイツロマン派を経て、デンマークに定着しつつあったジャンル Eventyr (童話) に独自の境地を開き、今日の童話の源流となるものを生んだ」日本児童文学学会編『児童文学事典』 東京書籍, 1988, p.29.

- (16) ハンフリー・カーペンター、マリ・プリチャード、神宮輝夫監訳『オックスフォード世界児童文学百科』原書房、1984, p.50.
- (17) 「……hun løftede den lille pige op på sin arm, og de fløj i glans og glæde, så højt, så højt; og der var ingen kulde, ingen hunger, ingen angst, — de var hos Gud! (SEH, p.281) :おばあさんは少女をうでに抱きました。こうして、二人は光とよろこびとにつつまれて、高く高くのぼっていきました。そこはもう、さむいことも、おなかのすくことも、こわいこともありません。——二人は神さまのみもとにめされたのです。」
- (18) 子どもの無垢さは、社会という環境に左右される頼りないものであり、児童文学の上にも反映された。1830年代以降の子どもをテーマとする文学を支配した要素は、社会の中におかれた子どもたちの境遇であったし、ロマン主義時代には、子どもの無垢とかよわさが強調された。
- (19) 山室静『アンデルセンの世界』中のゲオルグ・ブランデスの評論「批評と肖像」、1870の山室訳 p.43.
- (20) 一方、父親は、靴職人ではあったが、読書好きな文学青年であり、庶民には珍しい合理主義的思考を持っていた。アンデルセンも大人なってからは、父親と同じ見解をもつようになったという。(Johan de Mylius, Hr. Digter Andersen, G・E・C GAD, 1995, p.146.)
- (21) カント的啓蒙思想家であって理性の支配に対して楽観的信頼を持っていた。彼は人間における意志の自由を認めたが、たとえ人が恣意的にまちがって自由を用いても、自然全体を支配する理性はこうしたまちがいによるダメージを自動的に補正すると考え、人間の自由意志は理性の支配から独立していると主張し、自然における悪の現実性を強調したグルントヴィの考え方を認めず、論争し、彼自身の考え方である自然を包括的に理解して、自然の内部に存する精神性、言い換えれば自然に内属するすべてを包括的な理性の働きを主張した。(中里巧『キルケゴーとその思想風土』創文社、1994、註 p.54.)
- (22) 山室静『童話とその周辺』朝日選書、1980, p.90.
- (23) 「mens de sad på deres bænke og lærte noget, sad den på sin lille grønne stilk og lærte og så af den varme sol og alt rundt omkring hvor god Gud er.」(Samlede Eventyr og Historier, p.106.) より、拙訳。
- (24) 梅原猛は、賢治の童話では、「動物も人間も対等な同じ生命をもっている」という。そして、「そこでえがかれるのは、動物と人間が共通にもっている生命の運命である。賢治は、童話によって人間世界を風刺して、人間世界を改良しようとしたのではない。むしろ、人間が動物をはじめとする天地自然の生命と、いかにして親愛関係に立つべきかを示したのである」(大島宏之編『宮沢賢治の宗教世界』渓水社、1992. p.300.) とし、イソップの物語とは異なるものであることを指摘するが、イソップの寓話と童話の違いは前述のとおりである。
- (25) 天沢退二郎『<<宮沢賢治>>論』筑摩書房、1976, p.12.
- (26) 天沢、前掲書, p.16.
- (27) 佐藤郁之「宮沢賢治における宗教言語の可能性」日本宗教学会『宗教研究』三四号、2002. p61.
- (28) 島蘭進『「生存競争」と民衆的宗教運動』天理大学おやまと研究所年報第3号、1997, p.109.
- (29) 一次元性とは、日常的世界と超越的世界の中に断絶がなく、登場人物は彼岸の世界超越的存在とあっても驚きや好奇心や憧憬や不安を感じないことであり、登場人物は、立体感のない切り紙細工にたとえられ、内面的な世界や周囲の世界を持たない平面的なものとして語られる。それゆえ個々の人物もエピソードも孤立している。(マックス・リュティ、小澤俊夫訳『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社、1969.)
- (30) 『ピーター・パン』の劇中では、妖精なんて信じないと誰かがいうたび妖精が一人ずつ死んでしまうとされる。毒を飲んで瀕死の妖精を助けるために、ピーター・パンは「おーい、君たち！この世に妖精がいるってこと、信じてくれるかい？」と観客に呼びかける。「信じるよ！」と子どもたちが

答えることによって妖精は生き返る。

- (31) 井辻朱美『夢の仕掛け』NTT出版, 1994, pp.33–35.
- (32) 「幻想と未来」『フロイト著作集③』, 人文書院, 1969, pp.373–375.
- (33) C. S. ルイス, 濑田貞二訳『銀のいす』岩波書店, 1986, p.361.
- (34) ガストン・バシュラール『水と夢』国文社, 1985, p.31.
- (35) 岩田慶治『子ども文化の原像』日本放送出版協会, 1994, p.128.
- (36) 岩田, 前掲書, p.142.
- (37) 藤岡喜愛『イメージと人間』日本放送出版協会, 1974, p.81.
- (38) 岩田, 前掲書, pp.203–205.
- (39) 恩田逸夫著, 原子朗・小沢俊郎編『宮沢賢治論3 童話研究・他』東京書籍, 1991, pp.42–43.
- (40) 岩田, 前掲書, p.142.
- (41) 岩田, 前掲書, pp.156–159.
- (42) 岩田, 前掲書, p.128.
- (43) 岩田, 前掲書, p.128.
- (44) 脇本平也, 『宗教学入門』講談社, 1997, p.175.
- (45) 脇本, 前掲書, p.176.

# The Religious Nature of Children's Literature

Chieko ŌSAWA

Much of the content and subject matter of children's literature includes religious aspects. Before the modern period, there were myths, legends and folk (fairy) tales. Similar trends can be identified in textbooks and guidebooks for behavior, morality and religion of this era.

In the nineteenth century, Hans Christian Andersen created original tales for children. In May 1835, he published a short volume entitled *Eventyr, fortalte for Boern*, containing the original story "Little Ida's Flowers," which is considered to be the advent of children's literature. Andersen's story integrated imaginative folk beliefs and the realism of modern science. Many authors in England subsequently contributed to this new literary genre. In Japan, Kenji Miyazawa was also influenced by Andersen's story. He was a celebrated author who was simultaneously a promoter of faith in the Lotus Sutra. The literary and religious sides of his stories are thus inseparable, and his tales contain aspects of both imagination and realism. A dual-structured work of his that balances the fantastic and the mundane, called "Frame Story," typifies Miyazawa's style of fantasy. In his fables, a hero or heroine breaks through to another world from reality. Miyazawa was unsuccessful in his religious activity in real life, yet he attempted to surmount his troubles through literary fantasy. He strongly believed that fantasy could take us to the realm of truth which lies beyond reality.

Miyazawa's dualism can be compared to children's primitive religious consciousness. The religious view of children is typified by aspects of prognostication, reunion, absorption and prayerfulness. Children correspond with God in their imaginations without departing from reality. They become absorbed in the realm of imagination, then turn back to face reconstructed real life. Thus children can gain experience, develop their imaginations, and apprehend the spiritual world as truth.

Children's authors similarly made full use of their imaginations in creating alternate realities and, through this, attempt to understand the meaning of the world. Trying to escape from one's troubles in reality, one is not able to overcome difficulties. However, once absorbed into the world of imagination and separated from reality, one stands face to face with one's own troubles. Thus one re-encounters the world objectively, and finds a means to overcome difficulty.

Children's literature maintains a balance between reality and fantasy, because it uses the power of children's imagination, which is why it is an effective means of conveying an author's religious view. It is through the religiosity of children's literature that we will be able to cope with difficulties and make a new life, providing we realize that realities can often be influenced by our own imaginations.